

はしがき

| | |
|-----|---|
| 著者 | 那須 紀夫 |
| 雑誌名 | 神戸市外国語大学外国学研究 |
| 巻 | 67 |
| 発行年 | 2007-03-26 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1085/00000604/ |



は し が き

言語現象は必ずしも単一の研究領域だけで説明がつくわけではなく、言語体系を構成する複数の領域と深い関わりを持っているのが普通である。現象を的確に説明する原理体系を構築するには、諸領域間の相互作用を明らかにし、単一の現象に対して複眼的なアプローチをとることが不可欠である。とは言え、一人の研究者が多岐に渡る領域の問題に対して包括的な研究を行うことには自ずと限界があるため、異なる領域を専門とする複数の研究者による協力体制が必要となる。

このような要求に応えるべく、本研究班は研究領域の境界線上にある現象の分析を通して、領域間の理論的整合性を高めること、そして具体的事象に対して有効な分析を与えることを目標に活動してきた。具体的には以下の二つが活動の中心であった。一つは構成員による個別の研究である。音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論という理論言語学の中核を成す分野を専門とする個々の構成員が、各自で領域横断的な現象をとり上げ、各領域で用いられる原理やアプローチを比較（あるいは援用）しながら現象の分析を試みた。もう一つはほぼ隔週で行ってきたワークショップである。ここでは言語体系を構成する領域間の理論的整合性をテーマとした文献を検討する作業を行い、構成員の個別研究に還元させることを目指した。本報告書はこれらの成果をまとめたものである。

理論言語学の進展は理論装置の精緻化をもたらし、説明力の高い理論の構築に大きく寄与してきた。しかしながら、理論の精緻化には絶えず研究領域の細分化という副産物がつきものであるため、結果として言語現象が本来備えている多様な側面を的確に捉えきれなくなるというリスクが発生することにもなりかねない。研究領域の細分化から生ずる齟齬を解消する方向性を見出すことは、現代の理論言語学研究に与えられた課題の一つであると言えよう。本研究班の活動がこのような問題の解決に多少なりとも貢献するものであれば幸いである。

2006年11月

研究班代表 那 須 紀 夫